

(株)よかネット

4 (1.199) (3.4)

地域経営と公民協働のまちづくりを考える ~第3セクター研究学会九州大会報告~ …………………… 1

国営地方公共団体から民営地方自治体へ ~地域経営・地方財政・第三セクターの経営の視点~ …… 3

居酒屋が自然薯づくりを始めた"わらじや"の崎田裕子さんと こだわりの卵農家が鳥料理店になった"すうゆう庵"の末崎貞子さん ……… 6

~第2回福祉セミナー報告~ 10

見・聞・食

NETWORK

「知」を生かした地域の自前の産業づくりをめざして ~スコットランドの取り組み~ 12

行政と先生とのネットワークで進める合宿誘致活動

田川銘菓「黒ダイヤ」物語

_{いっという アンプラー スパンコン} 変 近 い **況** いこ

まちづくりから生まれた劇団の旗揚げ公演

~ "忠臣蔵"をみんなでつくった~ 16 である。ため、「「され、アーロギ」、注意では<mark>子どもからお年寄りまで炭坑節を楽しもう!</mark>。「これ」、主義など、アーローで発展

なぜ人々はファーマーズマーケットが大好きか? なアハベルノ/ アメリカでも百姓市がはやっている20

所員近況



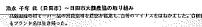
左側上から 千年氏 巧児氏 加留部貴之氏 杉谷 岩曜氏

右側上から 広松 伝氏 昌司氏 全田 出井 信夫氏 伊東 弘文氏

(本文は2頁より)



地域経営と公民協働のまちづくりを考えるセミナー



今村 巧児 氏(太宰府市)~太宰府市いきいき情報センターのあゆる 商業施設援測後の建物の残存機能を生かし近隣商業と文化センターに。行政が大連法の事品を

加留部 貴之 氏(福岡市)~NPOふくおかの活動とまちづくり

杉谷 岩鶸 氏 (大分県三重町) ~大分県三重のニコニコ生活村のとりくみ ない部分で、高齢者が育成を失わない付づくりへ。所で百数十人の展用師化に。

世利 洋介 氏 (久留米大学) ~地方公共団体は今後どのような地域経営に関わるか **込傷の役式での取り組みと(III)福岡保油町村研究所の役員**

広松 伝 氏 (柳川市) 一一柳川市の最新高生の取り組み 公民一体の展別尚生の取り組みで木のされいな故郷を他語。故古人帰川の頃光洋楽づくり

主催 第3セクター研究学会

货段 地域经常研究会





2 3 ①報告者勢ぞろし

②熱心な参加者 ③当日資料

地域経営と公民協働のまちづくりを考える

~第3セクター研究学会九州大会報告~

尾崎 正利

今年6月、第3セクター研究学会(会長金田昌司教授・中央大学経済学部)の九州大会の開催に向けて、 その企画と事務作業を当事務所が行うことになった。

● "公民協働で儲かる地域経営" セミナーのねらい 大会のテーマは第三セクターそのものの研究という よりも「地域経営」という拡がりにした。今、日本は 巨大な財政赤字を抱え、雇用不安が懸念されているが、 地域社会全体から見ても、第三セクターというよりは、 地域でどんな産業を興し、どのように雇用を確保し、 どんな楽しみを作っていくかという「地域全体の将来 像」に関心が向かっていると考えられたからである。

そして事例を聞きながら一緒に考えるセミナー形式 の集まりとした。

●九州各地から総勢70名の参加

10月5日の大会当日、会場である博多区の三鷹ホールには総勢70名以上が参加した。参加者は自治体職員、大学の研究者、第3セクターの支配人、NPOの職員などで、福岡県下を中心に九州各地からの参加があり、宮崎県椎葉村や長崎県五島の小値賀町などからの参加もみられた。

この日に向けた参加呼びかけも、①大学の研究者だけではなく、地域づくりに関わっている人に幅広く呼びかける、②県下の市町村からも参加して欲しいため ・
励福岡県市町村研究所から呼びかけていただく、ということを当初から決めておいた。



報告に聞きいる参加者

●さまざまな現場から地域の豊かさづくりの実践報告 講師をお願いしたのは次の6人の方々である。

一番目は広松伝氏。昭和52~60年の間、柳川市で荒れた堀割を市民と行政が協働作業で再生に取り組み、クリークのまちとして注目を集めるとともに、川下りをはじめ観光業での雇用を大きく伸ばしたあゆみについて(本誌3号や平成4年度NIRA研究レポートで紹介)。

二番目は池永千年氏。日田大鶴農協で一点突破型農業を通して、山間地の高齢者ばかりの地域でも成り立つ農業を築いたあゆみについて(本誌53号で紹介)。

三番目は今村巧児氏。太宰府市で店舗撤退後の建物 を壊さず、残存価値を生かしリニューアルする方法で 駅前の賑わいを維持したとりくみ(本誌48号で紹介)。

四番目は杉谷岩獺氏。地域に密着した医療・福祉の 営業活動と無理のない少しずつの開発で、地域に喜ば れて、200名以上の雇用を創出したとりくみについて (本誌34号で紹介)。

五番目は加留部貴之氏。NPOサポート事業を行う NPOの活動を通して、公民協働の見通しについて。

六番目は世利洋介氏。今回の学会開催にあたって後援していただいた(財)福岡県市町村研究所の顧問として、これからの自治体と地域の協働について。

各講師の持ち時間は一人30~40分で、それぞれ各地の取り組みについて報告が行われた。ここでは、誌面の関係上全ての紹介はできないが、それぞれの報告から印象的な話をとりまとめた。

【広松伝氏】

・堀割浄化の作業をはじめる前、すでに昭和52年春には、市内部のプロジェクト会議により埋め立て計画まで決まっていた。「今までの城堀浄化は行政が金を出しても、すぐに元のもくあみだ」、「柳川市の城堀は農業用水であり観光の資源だと思うが、埋まって使えない城堀は整理した方がいい」、「周辺の町も汚れた堀を埋めて有効利用している」という意見は多かった。

- ・しかし、埋めることは柳川の長い水との付き合いを全て断絶することになる。文化・暮らし・生態系のあらゆる面でそれは避けるべきであった。うまくいかなかった理由は行政と住民が一元化せずバラバラに取り組んだためで「行政と住民が一体で取り組むべき」という広松さんの意見(当時、環境課の埋立て担当係長)を市長がくんでくれた。昭和53年、埋め立て計画は6ヶ月凍結され、河川浄化計画の作成が決まった。
- ・実働にあたって住民の参加を呼び込むため、「城堀の うち観光に使っているところ優先で始めるのではな いか」という市民の疑問を払拭し、浄化活動が地域 全体のために行うという市の姿勢を示すため、あえ て観光スポットではなく、堀が埋まってわずかな雨 でも溢水するような場所を優先的に整備した。
- ・懇談会だけですぐ一致団結とはいかなかったが、町内の堀や川を見て回る現地見学会を始めて、違法建築物や埋め立てなど問題点さがしを行うフィールドワークを通じた意識形成が効果的だった。具体的に違法建築物を撤去するよう地元で取り組み、機械が入らない狭い場所は人手によるなど、人海戦術での活動が地区ごとに進められた。56箇所あった不法建築物は着手までに50箇所が撤去され、城堀が開かれていった。
- ・柳川の観光の目玉はこのようにして形成され、多大 な雇用・所得を生み続けている。

【池永千年氏】

- ・はじめ大鶴農協に行った頃は、農家は高齢化が進んで嘆き節ばかりだったし、農協も種や肥料の納期を遅れるなど組合員との信頼関係はなかった。農協も僅か5軒の畜産(乳牛・肉牛・採卵鶏)で販売額の8割を占め、残りの農家は山間部の3反農家ばかりだった。
- ・やる気のある10人のお年寄りを見つけた。何よりも「流した汗に報いる」成果こそが全てと考え、作ることと同じくらい、売り先の市況や地域の人々の嗜好など情報を的確に掴むことを重視した。
- ・大鶴農協では、少量ながら需要が確実にあるもの (バーやホテル、料亭などで使われる食材など)を中 心に作り、市場で値崩れしないよう心掛けて、全国 35市場に年間70~80品目を送り込んでいる。
- ・高齢者ばかりの地域といっても日本中にある。生き

がいづくりと経済活動が結びついて、勢いにつながるには適人適作と総員が参加できるような、自立意識を地域で持っていくことが何よりも大事だ。大鶴地域では最初10人の取り組みからスタートして3年目でゲートボールが消えた。自分で頑張って自分で成果を得た人が、村の中で仲間を増やしたことが、地域全体で自立意識が芽生えたきっかけになった。

【今村巧児氏】

- ・西鉄五条駅はベッドタウンの最寄り駅であるため、 駅前の地域最大手の商業施設が閉店したとき、夜の 帰り道を照らす照明は消えて薄暗く、誰も管理しな い建物は少年非行の温床になりかかっていたことも あった。
- ・裁判所から競売で取得した当初は、建物を壊して使 おうという考えもあった。しかし、建物の解体費用 だけで3億かかるということと、残存価値が15年あ るということで残してリニューアルする方向を決め た。
- ・阪神大震災でビル倒壊が続出したため、耐震構造の 基準が大幅に変わり、建物取得後、新しく壁を抜い て外に面した窓を開けたため、代わり補強材が必要 になり、結局13億円の補修工事費を要した。
- ・それでも2階部分が文化交流・情報発信スペースで 平日は夜まで、休日も終日、人が活動するようにな り、1階が生鮮品中心のスーパーで明るい雰囲気の 店になっているため、閉店前の店舗よりも人が増え たという意見も多く寄せられている。

【杉谷岩彌氏】

- ・片田舎で診療所を開いたとき、開発と建設と資金は 建設業者、医療サービスは辛島先生(お医者さん)、 客引きは杉谷さん、という3者の役回りをもった。
- ・患者の多くは医者の前で緊張して「どこが痛いか」 さえ忘れてしまう。診療所をもっと身近に感じても らえるよう、地域の集落を杉谷さんと辛島先生が一 緒に回って「健康講話会」を週に何回か行った。家 であれば地域の人も医者の前で緊張しない。講話会 に村人が10人集まると、その中の2~3人は必ず何 か具合の悪いところが見つかった。そうした人は必 ず診療所に来てくれる。杉谷さんは徐々に活動を拡 げた。
- ・こうした活動を通じて、診療所の営業活動という側面だけでなく、地域のお年寄りの交通や移動の不便

- さをいかに解消できるか、という生活の安心をサポートするサービスへとつながった。患者を自宅まで送迎するバスは、医者と患者の医療行為を通じた従属関係であるとして、当時、認められていなかった移送サービスを陸運支局に運動して認めらた。これは全国各地で病院などが行う移送サービスのはしりになった。
- ・杉谷さんは今はニコニコ生活村の名誉村長。現在は お生まれになった北九州市の小倉南区郊外でホーム ヘルプサービスの事業を立ち上げている。介護保険 サービスのメニューと料金が一目見て分かるような イラスト解説を加えた「目で見る介護保険」を作成 している (無断転載自由と書かれている)。

【加留部貴之氏】

- ・地域の中で行政でリードできない分野のサービスが 重要になっている。例えば、村おこしで地域の人々 を導き、勇気づけ、経験と実例をもって示していく 役目は誰にでもできることではない。
- ・これから先の社会では、個人の想いを発揮できる環境づくりが重要になる。NPOの役割もそうした活動を発揮できる受け皿としての役割ではないか。

【世利洋介氏】

- ・県下の広域圏の中には、NPOやボランティアが行政 組織と協力して有効に機能していくために、地域が どのような環境をつくっていくべきか検討を行って いるところもある。
- ・市町村合併の推進により自治体の一般財源が削減されるということがいわれているが、その中で地域の住民と公共がともに関わっていく機会をいかに作るかが問われている。
- ●会場からは地域事情に即した質問が出された

今回のセミナーでは、テーマである"地域経営"について、参加者との意見交換を行いたいと考えていたため、講師の報告のあと、出席者の質疑を交えた討論会を1時間もつことにした。

6人の講師の報告は、いずれも地域事情に即した取り組みであったが、手を挙げて質問していた参加者も 様々な地域事情に即したものだったように思える。

以下、出された意見や質問をいくつか挙げてみる。

・「地域に観光客がきて産業として何か生かそうと考える場合、地域にどんな経済的効果が生まれてくるか、ということを地元の人に分かりやすく伝えて、

- みんなで考えるようなことはできないか」
- ・「中山間地でできる農業のあり方として、とても参 考になった。市場に細分化して出荷する場合、どう いう点を重視したらよいか」
- ・「市町村合併が進んだ場合、離島が生き残る道筋と してどのようなことができるか、地域で豊かになる 方法をもっと知りたい」
- ・「NPO法人を設立しているが、今後社会的にどのように存在意義を示していくべきか模索中である」
- ・「街中で空いた施設をあえて壊さないという決断も 重要だということが分かった」
- ・「医療や保健で営業活動を含めたマネジメントは大事だ。しかし、田舎で医療活動を行う場合、どうい ・ う点を重視したらよいか」など。

今回の学会は、学会といってもあまりカタい雰囲気にならなかったのは、講師の方々のお話がどれも的を得たものだったからだと思う。参加者に反応をきくと「ふつう学会といえば、難しい話に居眠りが定番だが、今日のは楽しく聞けた」とか「参考になった」といったプラス評価のご意見を多くいただいた。

またテーマであった"地域経営"については、今回 出された質問や意見をもとに、何か具体的な取り組み に転じていきたい。 (おざき まさとし)

※) 10月5日のセミナーのとりまとめ作業を進めています。興味のある方は当事務所までご一報を。

国営地方公共団体から民営地方自治体へ

~地域経営・地方財政・第三セクターの経営の視点~

糸乘 貞喜

●地域がつぶれても役所はつぶれない時代は終わった

「国債発行が30兆円では、地方財政が持たない。交付税を削るのは問題だ。もっと赤字国債を発行せよ」という声が多い。ここで言われている「地方」とは一般に市町村のことである。そこでは経済活動領域として、三つのテリトリーが考えられる。図で見るように、Aは地域の産業・雇用・福祉・文化などの「地域の豊かさ全体を図るワク組」である。一方、Bの地方公共団体の財政というワク組は、「行政を行う事業体」のテリトリーで、Aに含まれる。Cの第三セクターという分野は、Bの一部と見られる。

第三セクターの経営という問題を取り上げると、なんとなくネガティブなイメージがつきまとう。よい経営をして、地域に福祉や経済効果をもたらしている第三セクターも多いのに、多くの有名第三セクターが、放漫経営(実態は経営不在)によって崩壊したことによって、第三セクターというと浪費の元凶のように見られている。

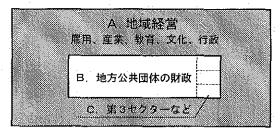
地方公共団体の財政も、ポジティブな感じを与える ことがない。それは「限界のある財の消費」であって、 財が増殖するということがないからである。

明治時代の話はともかく、戦後205の市、1,797の町、8,518の村があった。この中の多くの村が、過疎化によって消えていった。「過疎」という言葉が一般化したのは、「日本の過疎地帯」(岩波新書)という本が出た1968年以来だと言われている。私は丁度その頃京都に住んでいて、この本の冒頭に出てくる左京区広河原(戦前に過疎化していたところ)に行ってみた。広河原のような、家の柱だけが残っている村が、この30年余の間に日本中に現れた。行政組織としての役所(事業所)は、合併によって、雇用も含めて支えられたが、過疎地の村は働き場も人々も消え、朽ちた廃屋が残っている。

1981年だったかと思うが、ある町の総合計画を手伝わせていただいていた。あとで考えてみると、私もひどいことをしていたと思う。世の中は「工場誘致」とか「文化会館・体育館」などと言っている時に、「この土地の資源を生かしたモノ作り」とか、「特色を生かしたサービス業は考えられないか」などと言っていては、チームのメンバーも鬱陶しかったに違いない。だからといって、課長さんと仲が悪くなっていたわけではない。私が一生懸命なのは分かってくれていた。

●地方の税収を増やすのは、損なんですよ

ある時、昼の食事を取りに町の食堂に行った。双方が食べ終わって、お茶でも飲んでいた時だったかと思



地域経営:住民が働き、遊び、暮らすことの基礎 自治体財政:職員の給与を第一に考えられやすい。 3セクの切り口:行政内部の問題と見られやすい。

う。課長さんも言いあぐねていたのだと思うが、おも むろに「糸乘さんねー、産業が興ったり企業が来て税 収があがっても、その分は交付税から削られるんです よ。いろいろやって、地場産業の振興をするのは、し んどい上に経費もかかるので損なんですよ」と、教え てくれた。もちろん、私が交付税のことを知らなかっ たわけではない。しかし、「そんなことは知っている」 と反論はせずに、言葉を飲み込んだ。別のうまい言葉 も出るわけではなく、まさに後味の悪い食事だった。

いまだに「我が町は道路が悪いので、工場誘致もままならず……」などという首長さんがおられるが、この町では近くに数十万の都市もあり、通勤すれば雇用も心配がなかった。人口も横這いか微増であったし、「十年後・二十年後を考えて……」といったコンサルのご託など聞く気にはなれなかったのであろう。

結局のところ、市役所や町役場の職員は、国営の「地方公共団体」企業の従業員であった。その事業所を存立させている主体が国であって見れば、やむを得ない事情である。経済は常に右肩上がりで、税金はいつの年でも「自然増収」が有ることになっていた。それをもとにして、年々補正予算が組まれていた。昨今のように、赤字国債で補正を組むなどといったことは思いも寄らなかった。

バブル以降、国の財政構造が変わって、税金が入ってこなくても赤字国債をドンドン増発した。次世代の若者や子・孫にツケ回しをして恥じない大人が跋扈している。悲しいかな我々は、子や孫のすねを囓って生き血をすう立場に立っている。

●地域が生き残らないと、役所がつぶれる時代へ

最近、地方交付税の減額が話題になっているが、新聞に「交付税が減らされると、職員の給与の支払いも心配だ」(西日本新聞)という記事が出ていた。1975年頃、オイルショックのあと財政が逼迫したときに、ほとんどの地方公共団体が、住民向けの事業を大幅に削って職員の給与の確保に走ったことがある。つまり地方公共団体は、住民に対するサービス機関ではあるが、一方では職員を雇用する事業所であり、どちらかというとその側面の方に切迫感があるのでやむをえないことである。

しかし、「地方分権」と言うことが唱えられ、交付税 ではなく自前の税収で、役所という事業所を維持する ためには、税収が上がるような地域経営をしなければ ならない。

市町村の場合には、①住民に豊かになっていただいて、住民税を負担してもらう、②住みやすいまちづくりをして、地価が騰がってもぞれ以上に住んでいる人が喜ぶまちにし、固定資産税をいただく、③事業活動を活発にして、事業所の住民税などが上がるようにする、などの考え方の切り替えが必要になる。今後の推移のなかでは、税の体系も変わるかも知れないが、いずれにしても「豊かな地域づくり」のみが役所の頼みの綱となる。

「地域が生き残らないと、役所がつぶれる時代」になっているのである。

●地域経営の視点

「地域を豊かにする」という課題に応えるためには、 「地域の富を増加させる」経営体が必要である。それが 第三セクターであっても、もちろん構わない。

地域経営の原点は、「①あるもの生かす、②つながりつける、③導入する」である。地域経営はその地域にあるモノやコト(祭りや伝説などの文化)が、スタートの起点になる。そのうえで、ユーザーを始めとする多くの人々とのネットワークを大切にしながら、仕事を作っていく。仮に導入する場合でも、①と②の上に立って企画をしなければうまくいかない。今まで、あ

まりにも「工場誘致」のみに走りすぎた。実際には、 多くの地域に根ざした事業が地域に活力をもたらして いるのである。

1980年頃と言えば、「テクノポリス」誘致計画が、全国的にもてはやされていた。全て"シリコン"であり"ハイテク"であった。しかし今では、小泉構造改革内閣の「骨太の改革戦略・530万人の雇用拡大政策」の柱が、"生活直結型サービス産業"である。

ひとつユニークな事例を紹介する。大牟田市に"海の病棟"とも称される不知火病院(1987・徳永雄一郎院長)がある。ここのストレス疾患専用病棟は、治療効果が高いという評判である。川沿いに建つ建物も、陽光や水の揺らぎなどを採り入れたユニークな設計で、堅さの全くないくつろぎを持っている。ここの利用者は東京・大阪方面が大半で、地域経営の立場からいうと、よく外貨を稼いで大牟田市の所得形成に貢献している。投資回収どころか、あとに赤字とゴミを残した第三セクター経営の「ネイブルランド」と比べてみても、不知火病院の成果は大違いである。

繰り返しになるが、大牟田市には十数年前から、全 国の見本になる産業が活躍していたのである。

(いとのり さだよし)

人もうけ通信8

居酒屋が自然薯づくりを始めた、"わらじや"の崎田裕子さんとこだわりの卵農家が鳥料理店になった"すうゆう庵"の末崎貞子さん

澤谷真紀子、糸乘 貞喜

●居酒屋が兼業農家になり、農家が鳥料理店を始めた

"農家料理・雛遊庵"という看板だと思ったが少し違っていた。雛のツクリが鳥になっており、遊は游が正しく、気障な店名だとも思ったが、そこに農家というホットな雰囲気がついていた。一方の"わらじや"は畑の自然薯の方が初対面だった。

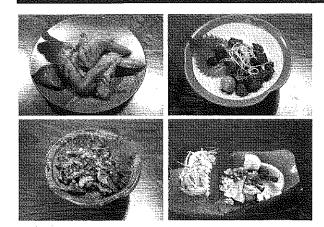
"すうゆう庵"は私の住まいと近いので、東京や関西方面から人が来る度に、賞味していた。"わらじや"にはこの夏に、西新の店に出かけた。店で「女将さんはいらしゃる?」と聞いてお会いした。「じつは、自然薯の畑とは会っているんですが」と言いながら少し話を聞いた。いずれにしても、店では話が聞けないので、

畑に行かれるときに畑で会うことにした。7反の自然 薯畑で、蚊に刺されながら崎田さんと話し、いずれ末 崎さんも含めて話を聞く約束をした。

●美味しい話を少し紹介

"わらじや"のウリは鮮魚と自然薯となっているが、 魚は少し気を配っている店ならば、福岡の店はどこで も旨い。オススメは自然薯である。メニューの一部を あげると、月見とろろ、いくらとろろ、納豆とろろ、 麦とろごはん、魚の山かけ、自然薯のお好み焼きなど で、友人を連れて何度か行ったが、生とろろ(単にす りおろしただけの物)やとろろ汁などはいつも絶賛し ている。

"すうゆう庵"は鳥の全部をいただくという考えが原



すうゆう庵、左より甘辛煮、肝煮、とり皮酢物、地鶏たたき点になっている。刺身だけ見ても、ササミ・ムネ・モモ・キモ・スナズリ・ハツ(心臓)・ホルモン・レバーがある(夏場は刺身を出していない)。もちろん塩焼き・唐揚げ・肝煮・うま煮・ピリ辛炒めなどなど食べきれないほどでてくる。それでいて3,000円は安い。農家昼定食は1,500円である。

最初から最後まで鶏・とり・トリのオンパレードで、 そのバリエーションの豊富さと最後の満腹感に驚かされる。盛りつけも美しくデザートも素朴でおいしいためか、いつ行っても賑わっている。

一度出かけてみていただきたい。魚・自然薯・鶏・ 野菜のどれをとっても、ご当地料理の趣が十分に出て いる。 (いとのり さだよし)

●出会いは農業者が主催する異業種交流会だった 末崎さんは、平成10年に"すうゆう庵"をオープン し、同じ頃、崎田さんは父の出身地で縁のあった志摩 町で自然薯栽培に取り組み始めていた。

二人が出会ったのは平成9年、志摩町でハーブ園を 経営する農業者が主催する異業種交流会だった。「料理 の店を出したい」と思っていた末崎さんと、「本格的に 自然薯を作りたい」と思っていた二人が出会い会話を 交わすうち、意気投合したそうだ。

「先日は、上手なクワ打ち方法(クワに土がつかないやり方)を教えてもらった」といった話もでてくるなど、これまでの経験を通して互いに教えあいながらきているようだ。

●居酒屋が、なぜ7反も農業をはじめてしまった のか ~崎田裕子さん~

崎田さんが経営する"わらじや"は、昭和50年に脱サラで始めたものだ。炉端焼きから始め、付け出しや野菜が食べたい人への心配りとして、母親に教えても



わらじや、生とろろと麦とろご飯

らった家庭料理を作っていた。その家庭料理がわらじ やの原点となっている。ふっきれたともはじけたとも 言えるかもしれないが、崎田さんが店の経営に責任も って取り組み始めたのが、7年前、離婚を期にである。 一方で、農業への夢は益々ふくらんでいったそうだ。

自然薯を店のメインとしだしたのは15年前で、最初の8年間は色々なところから仕入れていた。その後、知人が福岡市近郊で自然薯の生産組合を作ったこともあって、そこと協力しながら出していたが、平成10年には志摩町で農地を借り受け自分で栽培する自然薯が大半を占めるまでになった。

現在、7反の農地を借り、4.5反で6,200~6,300本の自然薯を植えている。2~3月に全て収穫し、専門の大型冷蔵庫で保管、年中通して口にできるようにしている。店の設備としては、自然薯用のおろし器などというのもあるそうだ。ちなみに、冬の2~3月に掘り起こしたものが、アクが少なく、味に円熟味が増しおいしいそうだ。

志摩町にこだわって農地を求めたのは、まず、父の出身地であり縁があったこと、次ぎに、店から20km圏内(農地を借りるときの移動上の距離限界)のところであったことと、異業種交流会などで、地元の人や農業委員とのネットワークが出来ていたことだという。当初は農地を借り受けることに対し、「何しにきたとな、不動産にするとな」と農業委員にも言われたこともあったそうだが、つきあっていく内に「ネットワークのある志摩でないと!」とこの地に執着したそうだ。

●卵農家が、なぜ飲食店を経営しようと思ったのか ~末崎貞子さん~

一方の末崎さんは、農業からが始まりであった。志 摩町に隣接する二丈町の農家に生まれ、小学校の時か ら「糸島農業高校に通い、農業をやる」と決めていた という根っからの農業家である。21歳で志摩町に嫁ぎ、 イチゴと米を生産していた。現在17歳になっている娘 さんを妊娠している頃には、ハウスのイチゴ栽培は体 力的に難しくなってきていた。この頃から、何を作っ ても作り損が続いており、「自分の作った作物に自分で きちんとした値段をつけられないのは農家だけではな いか」と疑問を抱え悶々としていた。

15年前、32歳の時に鶏卵の生産に取り組む。きっかけは、息子さんが病気をしたことであり、健康や命の基である食について「現在の食べ物は間違っている。せめて家族には自分が作ったものを食べさせよう」と意気込んだことだという。

最初10羽の家庭用だけだった鶏が、50羽、100羽と増えていき、1年後には500羽を飼育するようになっていった。ピーク時は1800羽を自家配合飼料で飼育していたが、それら全てを手作業で行っていた。自然食の店、学校給食、個人向けなどに出荷し、季節の折々に"収穫祭"と称してお客さんへ鶏料理をふるまいファンを増やしていった。この頃、ご主人が他界され、命への執着が強くなってきたという。色々な勉強を鶏飼育のかたわらに行い、「九州志摩の自然塩」など、現在もすうゆう庵の味にかかせない、よい食材に出会ったのもこの頃だという。

● それぞれ 10~15人の若者が元気良く働いている

自然薯、鶏ともに、自分達自身で育てているため、料理には素材の安全さに対する自信が感じられる。また、大事に育ててきたというお二人の気持ちは、"おいしい" "命を無駄にしない" "適正価格である" という面で料理に出てきていると思う。これを崎田さん、末崎さんという生産者の顔を見て「安心だな」と確認で

すうゆう庵 農家の季節料理(昨年12月の会席表より)

- ○季節の小鉢(大根と干し柿の酢の物、手づくりごま豆腐)
- ○前菜五種(山ぶどう白和え、里芋田楽、その他)

き、おいしさが増すような気がしている。

- ○野菜サラダ(とりささみ湯引き、または、ももタタキと野菜、すうゆう庵特製ドレッシングがけ)
- ○煮物(筑前煮)
- ○腕物(かぶ、ブロッコリー、れんこんひろうす)
- ○蒸し物(豆乳と自然卵)
- ○造り(とりさし)
- ○焼物(塩焼きももと志摩の塩)
- ○揚物(唐揚げ)
- ○鍋物(水炊き)
- ○飯(かしわ飯)
- ○香の物(自家製漬け物)
- ○デザート(手づくりを三種用意し選択していただきます)

その上、どちらの店も若い人が元気良く働いていて 気持ちが良い。"すうゆう庵"は10名、"わらじや"は 15名のスタッフがいるそうだ。スタッフにはそれぞれ の子どもさん(娘・息子とも)も含まれていて、たの もしい。福岡県西部のお気に入りコースに加えていた だきたい2店だ。 (さわたに まきこ)

行政と先生とのネットワークで進める合宿 誘致活動 ~ 鹿児島県宮之城町~

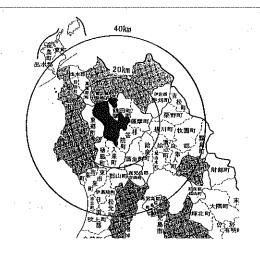
山田 龍雄

宮之城町は、鹿児島県の西北部、川内川の中流域に位置する町である。人口は約1万8千人弱ではあるが、中心市街地には商店街や病院などが数多く集積し、北薩摩地域の中心的な役割を担っている。鹿児島空港から車で約40分と近く、また、南は鹿児島市方面、北は出水市方面、西は川内市方面への道路が街中で交差しており、交通の要所にもなっている。この町は、竹林面積が約633haと広く、中でも孟宗竹林の面積は524haと日本一だそうだ。

宮之城町には江戸末期に発見された温泉地があり、 明治36年頃には、既に温泉宿が10件あったとされ、現 在でも9つの旅館が営業している。

昭和58年には、この竹特産品を活かした町おこしを しようという商工会青年部の奮起が発端となって「み やんじょうチクリン村」が結成され、その後の活動に よって、今では宮之城町=竹林の町というイメージが 出来上がっている。町中を走る幹線道路には街路樹な らぬ街路竹が植えられており、さらに町のイメージを 景観面でも創りだしている。

図 宮之城町の位置



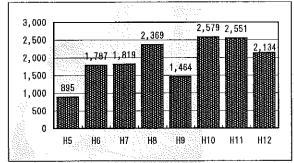
この「チクリン村」と併せて、もう一つ宮之城町で 積極的に取り組んできたのが、スポーツ合宿の誘致で あり、年間2,500人前後の合宿人口を呼び込んでいる。 そこで、このスポーツ合宿誘致のいきさつとどのよう なシステムで運営しているかなどを担当の商工観光課 の方にお聞きした。

●合宿誘致成功は人的交流、温泉地であることが 大きい

合宿誘致のきっかけは、高校の監督やコーチなどの 人的交流とお互い交流試合によって強くなれるといっ た、まったく当たり前のことであった。

- ・昭和60年頃、鹿児島商工の野球部や鹿児島実業のサッカー部の監督やコーチとの交流があり、これをきっかけに宮之城町で交流試合も兼ねた合宿をしていた。宮之城高校も当時はラグビーが強く、県大会は常連であった。
- ・今のように「スポーツコンベンション」という打ち 出しはしていなかったが、この当時から少しずつ町 も高校、大学の部活誘致を図っていた。
- ・宮之城町の温泉地は、最盛期には約10万人の宿泊客があったが、年々宿泊客は減っており、昨年は約2万7千人であった。合宿誘致は、温泉地の活性化がもう一つのネライでもあった。
- ・平成4年の総合体育館の完成、平成5年のがぐや姫グランド完成に伴い、平成5年に教育委員会が窓口となって正式に合宿誘致を行政として応援する体制づくりをした。この当時、日大ラグビー部のコーチが宮之城町の出身でもあったことから、ラグビーの合宿誘致も図り、今では高校ラグビー合宿だけでも県内外20校600人以上の参加がある。
- ・ラグビーの話しでは、町にある日本特殊工業(株) の工場長が神戸製鋼との付き合いがあった関係で、 昨年と今年の2年続けて、神戸製鋼のコーチが日本

図 宮之城町合宿参加人数の推移



※グラフの値:ラグビー、バレー、サッカー、水泳等の合計

特殊工業のラグビーの指導に来ている。

・現在、ラグビー、バレー、サッカー、水泳などで90~100校、約2,100~2,600人が宮之城町を毎年訪れている。

平成8年ごろからラグビーやバレー以外の「その他」が増えてきているが、その中昧は陸上、バスケット、ソフトボールなど、種類も多くなっている。下記の図の参加校の人数は、あくまで町を通して申し込んだ分であり、町を通さず先生同士のネットで直接参加している学校もあるらしく、実際の参加人数はつかんでいない。

●学校の先生の協力なしでは、運営はできない

これだけの参加校、参加人数に対して、どのように グランド、体育館、宿泊先などの煩雑な手配をしてい るのかが気になったので聞いてみた。

「受付は町がやり、あとはスポーツの種類毎に担当の 先生がおり、その先生に連絡すると、町内の先生同士 で話し合い、日程からグランドや体育館の調整、宿泊 先の手配をすることになっている。」とのこと。

役場も、先生の協力なしではこのような運営ができないらしく、長年の実績から生まれた町内外の先生同士のネットワークが大きな役割を担っている。

町が作っているスポーツコンベンションのパンフレットをみると、体育施設や宿泊施設はもちろんのこと、 水販売店、スポーツ店、弁当業者、医療機関、薬局、 コインランドリー、公衆浴場など、合宿する上で必要 な施設を紹介している。

●合宿誘致から波及する経済効果は?

ここで2,500人の参加人数、平均3日間という設定でその合宿から波及する直接的な次経済効果を単純に算出してみた。少々大雑把であるが、あえて数値を出してみた。なお、スポーツ合宿での使用する施設使用料は無料にしている。

旅館や仕出し屋などで町内で材料を仕入れているのであれば、さらに第2次波及効果が出てくるのであろうが、その割合がわからないので、ここでは割愛させていただく。

○旅館・宿泊

実際に旅館に泊まるのはラグビーとバレーぐらい で、他は公民館に宿泊とのこと。

(旅館宿泊)

1,500人×3日×5,000円/泊·2食=22,500千円

○弁当・昼の食事

2.500人×3日×500円/日=3,750千円 毎年、何かの大会があり、この参加者への弁当が 出されている。

2,000人×2日×500円/日=2,000千円

○氷代

100校×3日×1,000円程度=300千円

○その他個人の小遣い

2,500人×3日×500円/日=3,750千円

計 32.300千円

直接の経済効果は約3千万円程度ありそうだ。これ に、先生同士の交流会や材料の町内仕入れ、ガソリン 代、コインランドリー代などを入れると、もっと町に お金が落ちていると考えられる。

スポーツ合宿での経済効果は温泉地の宿泊売上げ概 ね2億7千万円(昨年の宿泊客実績の27,000人×1万 円)の1/10程度と決して大きくはないが、町のイメー ジアップと宿泊客が減る夏場の売上げに貢献している。 この辺の効果については、詳しく研究してみても面白 いのではないかと思う。

●今後はカルチャーコンベンションを目指す

宮之城町のもう一つの自慢が、吹奏楽団が全国でも トップレベルを維持してきていることである。

一般の部では16年間指導している先生の力もあり、 全国大会の常連である。また、中学の部でも九州大会 はほとんど出場という伝統をもっている。一般の部の メンバーは、遠くは福岡から月に1回程度来ている人 もいるらしく、人口1万8千人弱の町であっても全国 のトップレベルという力が、関係する人を吸引してい るようだ。

このように吹奏楽団のレベルが高いこともあって、 最近では福岡工業大学の吹奏楽団が合宿に来ている。 これから町では、単にスポーツだけではなく、カルチ ャーコンベンションにも力を入れ、交流人口の増加を 目指している。

宮之城町には、町外から柿酢やわらじといった町で 生産していないようないろいろな特産品の問い合わせ が多くあるらしく、役場に連絡すれば何でも手に入る ような印象をもたれているのかもしれない。

このように、チクリン村や合宿誘致あたりの外へ向 けた取り組みが、町のイメージアップやPRに大きな効 果となっているようだ。 (やまだ たつお)

すべてが自分のためになる活動に

~第2回福祉セミナー報告~

梶原 里香

7月より始まった連続福祉セミナー。その第2回を 8月29日に開催し、「特定非営利活動法人北九州あい の会 | の代表である石井カズエさんに、「『福祉NPO (特定非営利活動法人)』として自立した経営を語る」 というテーマでお話をしていただきましたのでご報告 します。

●自身の活動を話す石井さんはとてもいきいきと していた

「北九州あいの会」は平成3年に石井さんが立ち上げ 今年で10年目。平成11年にNPO法人を取得されまし た。「たすけあい事業(利用者に事前にチケットを購入 してもらい、介護・家事支援・産前産後援助・子守・ 外出介助などのサービスを提供する)」と「介護保険事 業(ケアプランサービス・ホームヘルプサービス・デ イホーム)」の2本柱で活動をされています。

石井さんはこちらがうらやましくなってしまうくら いいきいきと、そして楽しそうに活動についてのお話 をしてくださいました。その中で印象に残ったことを ご紹介したいと思います。

●「たすけあい事業」を続けるために介護保険を はじめる。

・NPO法人格を取得するまでは、「あいの会」の財産 すべてが個人名義であったため不安が多かったが、 法人格を取得したことで相続税を気にせず、またシ ステムが残りサービスを継続していけるようになっ た。そして「たすけあい」を続けるために「介護保 **険事業 | を始めることでお金のはいる仕組みをつく** った。介護保険のお金で雇った人に「たすけあい」 の活動もしてもらえば人件費もかからないので、へ



石井カズエさん

ルパー登録の申し込みに来た人には、必ず「たすけあい」の活動もしてくれるようにお願いした。「たすけあい」の活動ができないという人は、私たちの理念を分かってもらえない。「たすけあい」が私たちの理念。「たすけあい」を続けるために介護保険をはじめたという思いが強かった。

●利用者に喜ばれる場所を提供する

- ・「北九州あいの会」は、戸畑区で「デイホーム夕鶴」 を運営し、9月下旬には八幡西区に「宅老所おおう ら」を開所している。この取り組みは、利用者が 「いいな、助かるな、また行きたいな」と思う場所を 提供することが使命だと思っている。これらの施設 を改造する際、スロープの勾配など現場の考えを主 張して利用しやすい施設になるようにということま で考えている。
- ●「おもい」だけで終わらないよう、行動に移そう 石井さんのお話を通して、「おもい」を行動に移すこ との大切さを強く感じました。私は学生の頃、「失敗し てもいいからとにかくやってみよう」と、やりたいこ とにいろいろと挑戦していましたが、最近になって 「おもい」だけで終わってしまうことが多くなってきた 気がします。何でも思いつくままにやればいいという ものではないでしょうが、「おもい」だけで終わらすこ とのないよう、少しずつでも行動に移していこうと思 います。

住み続けたい、住んでみたくなる街を めざすことが住環境をよくする

糸乘 貞喜、本田 正明

去る9月8日に、長崎市の住環境計画の基本構想コンペで応募したところ、「面白いけど没」という評価で、残念ながら仕事をとることはできなかった。しかしながら、これからの住環境整備を考える上で、非常に面白い提案ができたと思うので、この場を借りて紹介したい。

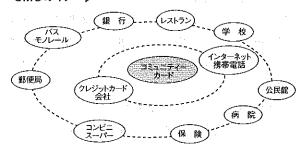
私どものネライは、

- ①まちに人々、特に高齢者がまちなかをウロウロ出回 りたがるまちづくりである。
- ②そのために、コミュニティカード (CMC) を作る。
- ③CMCさえあれば、スーパー、コンビニ、映画、図書館、病院、福祉施設などの割引サービスやIDカード

(社員証、学生証)として、利用ができる。

- ④街の中には、交通機関、映画館、美術館、博物館、コンサート、プールなど、利用度数とコストが対応しない施設がある(利用が増えてもコストのかからない施設)。これらの利用率をあげて、まちなかウロウロ係数を高める。
- ⑤銀行などと契約すれば、クレジットカードとなり、 買い物もできる。
- ⑥バスなどの交通機関にも対応する。
- ⑦CMCはまちなかウロウロ推進カードなので、利用数が増えるほどトクになるようなインセンティブを考える。例えば、市内の交通機関を一日中乗って400円(10日で4,000円)とするが、10日~15日の利用は200円/日とし、15日以上乗ると無料とする。更に25日以上利用者には「ウロウロ努力賞」として、3回分でコーヒー券、うどん券、映画券などをプレゼントする。
- ⑧斜面地の上下の交通動線に、低コストのモノレールを導入する。これはインフラ (レール部分)を補助対象とすると、十分採算対象になりうる。さらに既存の道路を改修してバス交通のを横動線とし、CMCの対象とする。
- ⑨小・中学生の通学も、子供用 CMC で対応する。
- ⑩今後検討を要するが、CMCは又貸しも可としたい。
- ⑪このシステムの運営は、クレジットや信販会社などを対象にして入札する。
- ⑩なお、コミュニティ間の独自性を持たすため、地域 ごとの名前を冠したCMCを作る。たとえば長崎でい うと、出島CMC、恵美須CMC、思案橋CMCといっ た具合にする。
- ③このシステムには、もっと沢山のメニューがのせられるので、「地域づくりの知恵募集」をして、地域づくりの気運を盛り上げる。

というものである。



よかネット No.54 2001.11

向性としては、斜面地の縦動線を整備し、それをカードシステムで支えることによってコミュニティーの活性化を図ろうというものである。

- i. 長崎市に生活の中心となるアクセシビリティーを 充実させて、住みたくなるようなたのしい街づくり をめざす。
- ii. しっかりした縦動線 (コミュニティーモノレール) の導入で、ちょっとした買い物の移動が便利にできるようにし、地域内の活動を活発にする。
- iii. 空き家を減らすため、斡旋、仲介、補修などの仕組みをつくる。
- iv. 道路整備とコミュニティーモノレール(道路とし

- て) つくり、これらをCMCで利用できるようにする。 v. このコミュニティーモノレールは、「安い、安全、 低速」のシステムで、利用者がカードで運行できる。 設備費が一般のモノレールの1/5~1/10ででき るので、民営でも採算にのると考えられる。
- vi. これらを利用して、もてなしのまちづくりで、観光産業などの振興を進めるとともに、交通システムの利用を増進する。

いずれ、機会があれば実現に向けて取り組んでいきたいと考えている。

(いとのり さだよし/ほんだ まさあき)

「知」を生かした地域の自前の産業づくりをめざして ~スコットランドの取り組み~

山辺 眞一

頭脳なきシリコンアイランドといわれてきた九州は、その頭脳集積をめざしたプロジェクトが進められている。その一つである福岡県の「シリコン・シーベルト・福岡」プロジェクトのメンバーにより、世界のシステムLSI設計拠点を目指しているスコットランドのエディンバラの視察が行われた。

現在、新キャンパスへの移転を進めている九州大学のウリの一つとしても打ち出されているこのシステムLSIプロジェクトは、国立大学の法人化における大学の21世紀戦略というだけでなく、地域と大学が連携して地域の自立をめざすプロジェクトとしても期待されている。

●英国におけるスコットランドとは

The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland、大ブリテンと北アイルランドの連合王国である英国の大ブリテンは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、の3つの地域で構成されている。このスコットランド地域には、半導体関連産業(製造業が多い)の集積が進められてきたが、世界的な半導体産業の低迷の兆しを懸念して、川下から川上への産業集積の再編への取り組み「プロジェクト・アルバ」が進められている。

今回のスコットランド視察は、このプロジェクト 「アルバ」の仕組みを勉強するものであった。 スコットランドは、大ブリテン島の北部に位置し、 人口512万人、労働人口248万人の地域である。福岡県 の人口は516万人、労働人口246万人であり、面積とし ては相当の違いはあるものの、人口規模はほぼ同じく らいである。

スコットランドの行政は、かつては独立国だったこともあり、イングランドの中央政府と一線を画した独立気風の強い地域である。1999年には、憲法、外交、国防を除く法律制定の権利が認められた議会も設置されており、今後はさらに自治意識が高まることが予想される。

ちなみに英国の各地域の独立性の高さを示すものとして、ワールドカップ・サッカーやラグビーにおいても、イングランド、ウェールズ、スコットランドというようにそれぞれの地域からチームが出ている(オリンピックの場合には、英国という一国地域である)。

●同じ悩みを持つスコットランドと福岡

スコットランドは、第二次世界大戦前後までは、石 炭、鉄鋼、造船、軍需関連産業などの重厚長大型産業

スコットランドと福岡県の比較

		・スコットランド	福岡県
面	積	78,133km²(1998年)	4,968km³(1998年)
, A		512万人(1999年)	516万人(2000年)
労働人口		248万人(1998年)	246万人(1997年)
国内総生産		562億£(1998年) 107千億円(1£190円)	181千億円(1997年)
同1人当たり		10,975ポンド 2,085千円(1£:190円)	3,500千円

(出典) スコットランド企業誘致局、福岡県資料



が主流だったことで地域 経済が維持されていた が、九州、福岡などの産 炭地域と同様、エネルギ ー革命後は急速にその経 済力が低下してきた。

そのため、日本の産炭 地域と同様に、スコット ランドにおいても、地域 の雇用を維持するため

に、エレクトロニクス産業を中心とする企業誘致に取り組んできた。その結果、スコットランドには、多数の世界的企業が進出し、エレクトロニクス産業の集積、さらに半導体製造産業の集積も進んだ。欧州においては、スコットランド地域の半導体生産シェアは7%(英国内では47%)、ワークステーション生産においては、欧州の約80%を占めるようにまで成長している。また、これらの産業による雇用は、エレクトロニクス産業で40,500人、同関連産業で29,500人の規模を有している。

一方、スコットランド地域の高等教育機関在籍の学生数は、13大学に約173千人、このうちフルタイムの課程修了者数は、毎年40千人が輩出され、2,500人の技術系修士完了の学生が生み出されている。

しかし、これらの卒業者のほとんどは、イングランドをはじめ欧州地域などに流出しており、スコットランド地域の産業集積が製造に偏ったものであったため、これら優秀な人材、頭脳を受け入れる集積は脆弱であった。

福岡県においても、大学卒業後に県内に就職する率は約40%であり、大学院修了者の定着率は、この率よりも相当に低いと言われており、スコットランド地域が抱える問題は、福岡県の抱える問題と殆ど同じであった。

●アルバ・プロジェクトとは

このスコットランドのプロジェクトは、「アルバ」と呼ばれている。「アルバ」という言葉は、スコットランド地域の古代の呼称であり、まだ英国に属さない独立国だった頃のものといわれている。こういうプロジェクト名を付けたことからも、スコットランド地域の独立への気概がうかがえる。

プロジェクトを推進してきた中核的な組織は、スコ

ティッシュ・エンタープライズ (スコットランド開発 公社) という機関で、英国各地域に設置された地域振 興のためのエージェンシーの一つである。

活動資金は、英国中央政府から出ているが、その活動については、地域振興という大儀のもと、エージェンシーの裁量にほとんど任されているようである。

プロジェクトの柱は4つあり、一つは企業育成やベンチャー支援、海外企業誘致を行う「アルバセンター」という組織の設置、2つめはシステムLSI設計を担う人材育成のための「SLI研究所(Institute for System Level Integration)」の設置、半導体設計の知的所有権IP(Intellectual Property)の取り引きを仲介するシステム「VCX(Virtual Component Exchange)」の構築、そしてこれらを吸引力として企業立地の受け皿となる約40haの「アルバキャンパス」の整備である。

●大学の新しい連携システム

これらのプロジェクトを実現するのに大きな役割を果たしてきたのは、アメリカの半導体設計会社「ケイデンス」であるが、推進力としての役割は、地域の4つの大学(エディンバラ大学、ヘリオット・ワット大学、グラスゴー大学、ストラスクライド大学)とスコティッシュ。エンタープライズである。

とくにユニークなプロジェクトは、4つの大学と公社が連携して設置した「SLI研究所」である。ここは大学院レベルの半導体設計関連の教育が行われているが、企業のミッションに応じて、研究所の学生がその企業に入り込んで研究開発を行うプログラムが組み込まれている。

さらに、ここを修了した学生には、運営に参画している4つの大学全ての名前の連名による修了証が与えられる。その称号は「ED (エンジニアリングドクター)」と言われ世界でも例のないものである。

日本の大学システムではおそらく不可能な修了証と 思われ、説明をされた先生も自慢げだったのが印象的 だった。

●これからの地域は「知」の「人材」が決め手

このプロジェクトは、半導体製造の川下から、川上への展開のために、半導体設計、デザインを担う人材の育成を狙ったものである。VCXというシステムは、これらのデザイン、知的所有権の世界的な流通システムを構築しようというものであり、この地域全体が、世界の半導体設計拠点となることを意図している。

日本においてもいま、「知」あるいは「頭脳」をキーワードとして、大学発のベンチャー、地域の新産業創出など、これらを担う人材の育成に力を入れ、その宝庫である「大学」の資源を徹底的に活用しようしている。人材の育成はともかく、人材が定着するためには、産業だけでなく、居住条件が大きな要因である。スコットランドのこのプロジェクトの場合、スコットランドに立地を決めたエプソンの人の話では、「スコットランドというのは、日本でいえば北海道みたいな地域で、欧州の優秀な研究者、技術者たちは住む環境を大事にしており、リフレッシュできる自然空間、あるいは引退して老後にのんびり住みたくなる地域としても、このスコットランドの環境は高く評価されている。」とのことであった。

日本においても、産業の集積形成と同時に、居住環境に対するいろいろなプロジェクトはあると思うが、働いている時の居住だけでなく、引退後の長い期間も快適に生活ができる環境かどうかを各地域が考えざるを得ないであろう。

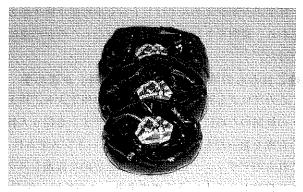
田川銘菓「黒ダイヤ」物語

~余った黒砂糖活用から生まれたお菓子~

山田 龍雄

筑豊地域は銘菓の発祥地である。ひよこ、千鳥饅頭、成金饅頭、すくのかめなどの数多くの銘菓を生む原動力となったのが、炭鉱景気とこれを支える炭鉱夫の甘いものへの渇望だった。その銘菓の一つに「羊羹黒ダイヤ」がある。私が小学校低学年のころ羊羹といえば、この黒ダイヤであり、当時のお菓子の中ではとりわけ甘かったことを覚えている。

もともと「黒いダイヤ」とは石炭のことであり、こ



「お菓子も見かけによらぬもの~中味が大切である」 とエッセイで紹介されている黒ダイヤ

の石炭の形をイメージした少し風変わりな羊羹が「黒ダイヤ」なのである。これほど石炭隆盛時代をストレートに表現したお菓子はない。

●40年ぶりに食べた黒ダイヤは、甘くなかった

市役所での打ち合わせの時間まで少し余裕があったので、ふと懐かしさもあって、かって田川市のメイン商店街の一つであった後藤寺商店街を歩いてみた。アーケードに入って数10mのところで黒ダイヤの看板を掲げているお菓子屋があり、私はその看板に吸い寄せられるように店へ入ってしまった。店には年輩の方がいた。私は目当ての黒ダイヤを注文し、「黒ダイヤがなつかしいこと、会社が倒産し、もうなくなっていたのでは・・・」などと話をすると、お店の方は、やはり田川のお菓子屋さんだけあって黒ダイヤに思い入れがあるらしく、いろいろとお話をして下さった。残念ながら、この日はゆっくり話しを聞く時間がなかったので、後日、黒ダイヤ物語を聞くこととなった。

事務所に帰って、早速所員と一緒に食べみたが、昔ほど甘くなかった。やはり今の味覚に合わせているのであろうが、何故か昔のままの甘い黒ダイヤを食べてみたいと思った。

●戦後の砂糖特別配給で生まれた黒ダイヤー

改めて菓子屋「さいじょう」にお邪魔し、黒ダイヤの誕生から復興の物語を聞かせていただいた。

- ・石炭が国のエネルギー政策の骨幹であったことから、 昭和21~27年ごろまで筑豊地域には食料特別配給が 行われており、この時期に砂糖(黒糖)も多く配給 されていた。
- ・炭鉱で働く従業員は、多くの砂糖を配給されても全部使いきれなかったらしく、三井鉱山の役員さんが、市内にあったお菓子屋「大月堂」に相談したのが、この銘菓を生むきっかけとなった。当時、考案したのは大月堂の経営者兼職人であった延永元(のぶながはじめ)氏である。
- ・当時、羊羹の材料である小豆も貴重であったが、三 井の後押しがあったことから手に入れやすかったことが、この羊羹開発につながった
- ・その後、大月堂は高度成長とともに売上げを伸ばし、 博多に進出。最盛期には「亀屋延永」という屋号で 6店舗を構えるが、炭鉱の閉山やお菓子会社の競争 の激化とともに店の経営も悪化し、平成7年に倒産 する。

よかネット No.54 2001.11

- ・店は倒産しても、田川地域のシンボルの一つである 黒ダイヤをなくしてはならないと、地元のお菓子屋 が中心となって黒ダイヤの商標保存を裁判所に訴え その結果、黒ダイヤを継承することができた。
- ・大月堂の会計士の方が、腕のいい職人に残ってもらい、有限会社亀屋延永として会社を復興させ、この 銘菓黒ダイヤを残した。現在、お菓子工場は穂波町 にあり、賃貸契約で稼働している。

この黒ダイヤは田川地域限定のお菓子であり、現在、 地域内の9店舗でしか販売されていない。

●「日本の名随筆集12 "味" ~田辺聖子編~」 にも黒ダイヤは紹介されている

これも店の方に聞いたのであるが、その随筆集の中で女性で最初の芥川賞を受賞した中里恒子が「黒ダイヤ」のことを書いている。神奈川県生まれの中里恒子さんがどのようないきさつで黒ダイヤを知ったかはわからないが、そのエッセイの中で、黒ダイヤの特徴を良くとられているので、その一節をご紹介したい。

『うまいお菓子の甘みは、総じて、ふくよかで、淡泊で、あと味がよいことであろうか。福岡県田川市、大月堂の黒ダイヤはちょっと違った趣きがある。はじめての方には、器に盛った、その素朴な固まりを、なんであろうといぶかるが、羊羹です。こんな格好ですがあやしいものではありませんとおすすめする。そして食べてはじめて、おいしいこと、しつこくなくて、もう一つ、ということになる。黒砂糖羊羹には上等のものが幾つかあるが、黒ダイヤは、上等上等しないで、上等の味をもっているいい菓子である。ひとは見かけによらぬもの一お菓子も、見かけによらぬ、中味が大切である。・・・・」

このエッセイは昭和53年に書かれているのであるから、まだ大月堂製造の黒ゲイヤであったはず。「しつこくなく」というのは、既にこの当時に甘さを控えていたのであろうか。

●購入者のほとんどはおみやげ用

購入者の8~9割はおみやげ用として買っているということだ。この地域には、炭鉱隆盛の時代に多くの炭鉱出稼ぎ者が来ており、この方たちが帰省するときに黒ダイヤをお土産として持って帰ったそうだ。それで今でもこの味を覚えている鹿児島、熊本、大分あたりの人からも注文があるそうだ。炭鉱閉山後、炭鉱で働いていた人は全国に職を求めて散っていったわけで

あり、当然、この黒ダイヤの味をなつかしいと思っている人は全国にいるのであろう。

●黒ダイヤは冷凍にすると日持ちもし、美味しい 最後に黒ダイヤを美味しく食べる方法を伝授しても らったので、紹介する。

羊羹は常温で長く置いておくとカチカチに固くなって、味も落ちてしまう。そこで、「黒ダイヤ」を適当な 大きさに切って、ラップにくるんで冷凍しておくと日 持ちもよく味も落ちないそうだ。

食べるときには冷凍した黒ダイヤを必要な量だけ、少し解凍すると、ひんやりとした甘みが口の中に広がるとのこと。小生は、まだ試していないが、機会があったらお試し下さい。 (やまだ たつお)

まちづくりから生まれた劇団の旗揚げ公演

~ "忠臣蔵"をみんなでつくった~

本田 正明

去る10月8日、志摩町の桜井地区で、ある劇団の旗揚げ公演が行われた。芝居に関しては、まったくの素人ばかりの集団でありながら、天本さんという地元の若い女性たちが中心となり、気がつけばスタッフが40名程度、雨天の野外公演にもかかわらず観客も300人近くほど集まるという大成功の公演を行うことができた。

●そもそものきっかけ

私が志摩町に係わるようになったのは、3年前の大学院生だったころであり、志摩町のまちづくりを修士 論文のテーマとして、町内を毎週のようにぐるぐる歩き回っていたことに始まる。

もともと私は、土木の橋梁設計等をテーマに研究していた学生だったので、都市計画やまちづくりはまったく未知の分野であり、現地調査といったフィールドワークは初めてだった。そのため調査の要領が非常に悪く、何度も志摩町に通い直しては、ヒアリングや写真撮影を行っていた。しかし、今思えば、このような活動が地元の人と仲良くなるきっかけになっていたり、まちづくりの運動を、地元の人に知ってもらえるきっかけになっていたように思う。私が"(株)よかネット"と繋がったのもこのまちづくりがきっかけだった。

●桜井地区からはじまった地域づくり

町全体のまちづくりと連携してはじまった地域づく りの動きでは、桜井地区が町内で一番初めに取りかか り、桜井地区の方々のワークショップを通じて、桜井 の名前にちなんで桜の木を植えようという動きと、劇 団を作ろうという動きが生まれた。

そのころ、私はまだ劇団活動と縁はなかったのだが、 桜の木を植える「植樹祭」のイベントを企画されてい た方を通じて、具体的な知ることになった。そのとき に劇団のお手伝いをしてもいいと言ったものの、まさ か自らステージに上がって、芝居をしないといけなく なるとは夢にも思わなかった。

●フィールドワークからライフワークへ

桜井の地域づくりに参加しはじめた頃から、私は社会人になっていたので、学生のころのように時間を自由に使えなくなり、志摩町を訪れる機会も減っていた。しかし、地域づくりが盛り上がるにつれて、桜井に対する思い入れも強くなり、知り合いになった方々からも、イベントに参加するように声をかけていただいたこともあって、飛び込みで劇団に参加することになった。同年代の人たちが中心となって劇団を盛り上げていることも、参加したくなる要因の一つだったかもしれない。

後に聞いた話では、私が大学院にいたときからお世話になっている樋口先生が、「本田は、少々強引に連れ込んでもいいよ。時間が立てば、自分から勝手に盛り上がって、いろいろするやつだから」と劇団の方にアドバイスをしていたそうである。実際に、役者をするだけでなく、舞台の小道具や衣装、メイクなどの裏方を手伝ったり、毎日夜中の3時までミーティングをしたりするようになったので、先生のいう通りになってしまった。

●日替わりで生まれたレッスンヒーロー

連日の芝居の稽古で、おもしろかったことは、練習 を重ねるごとに、次々と新しいレッスンヒーローが生



熱のこもった演技をする劇団員

まれたことである。色部又四郎がボイストレーニングを受けて声が遠くまでよく通るようになれば、高田郡 兵衛が、涙を流すほどの指導を受けた後には、目が覚めるような真剣な眼差しの演技をするようになった。 裏方が桜吹雪を自動で降らせるマシーンを完成させる と衣装担当がスタッフのみんなが目をみはるほど、派 手な衣装を吉良上野介と殺し屋の私に準備してくれた。

ヘアメイクとスタイリストの参加で、2役を演じていた役者のメリハリがうまくでき、最後には舞踊の方々の参加で、大石内蔵助の芸者遊びのシーンがぐっと内容のあるものになり、さらに照明さんがそのシーンをピンクのライトで演出効果を高めてくれた。

当初、劇団のメンバーは、半数以上が女性であり、 公演一ヶ月前になっても、まだ役者が全員決まってお らず、本当に芝居ができるのだろうかと心配だった。 最終的に全役者が決まったのは3日前ぐらいだったの を考えると、毎日のように芝居の何かが変更になって いたように思う。公演当日のリハーサルですら、天候 が雨になったために、本番と同じにはできなかった。

それでも、劇団の和が乱れなかったのは、スタッフ 全員の思いが、一つの方向にきちんと向いていたから だと思う。自分たちが芝居をつくることを楽しみなが ら、お客さんにいい芝居を見せようと、日替わりでレ ッスンヒーローが生まれたように、みんなが次々に演 技を磨いてきたり、アイディアを持ち寄ったり、新し いスタッフを連れてきてくてたりしていたからだと思 う。気がつけば、舞台監督から照明、ヘアメイク、ス タイリスト、衣装、振り付けにいたるまでのスタッフ が揃い、総勢40名に及ぶメンバーに支えられる劇団に なっていた。

●植樹された桜とともに育つ劇団へ

役者になっている人のほとんどが、初めての芝居で



立ち見が出るほど集まってくれた人々

よかネット No.54 2001.11

あり、声が遠くまで届かないなどの問題はいくつも抱えていたのだが、舞台監督の「いい演技はできなくとも、いい芝居だったら、みんなでつくれる」という言葉に励まされ、スタッフがそれぞれの弱点をフォローしあった。

初めてのことばかりで、何度もめげそうになったり、つらさに耐えきれず涙を流す人もいたが、それでも全員が、笑って本番のステージを迎えることができたのは、常に自分のつらさを見せずに、主役と脚本・演出をこなした天本さんの存在が大きかった。最後の挨拶のときに彼女は、植樹した桜とともに劇団を育てていきたいといった。桜井地区や志摩町にとどまらず、活動を行っていくつもりである。正直に言えば、活動は起こすことよりも、継続していくことの方が難しいのではないかと思う。でも、できないと決めつけて動かないのでは情けない。せっかく若いうちにしかやれないことに参加しているのだから、やれるところまで、とことんつき合ってみたい。 (ほんだ まさあき)

子どもからお年寄りまで炭坑節を楽しもう!

~炭坑節発祥の地"田川"での取り組み~

小田 好一

炭坑節は言わずと知れた盆踊りの定番であるが、その発祥の地は福岡県田川市とされている。地域の貴重な資源ともいえるこの歌を活用して地域おこしをしようという取り組みがあると聞いて、興味を持った。今回、この活動の中心人物である中村さん(福岡県立大学学生)に取材させていただくことができた。とても大学生とは思えない行動力に驚かされてしまった。

まず、炭坑節の歴史と現在の動向を少し紹介する。

炭坑節(たんこうぶし)

筑豊炭田の作業唄。もともと、石炭と石塊を選り分ける時の唄で「選炭節」と呼ばれた。大正時代の石炭ブームの頃、石炭成金たちが博多の花街で豪遊してから「選炭節」は「炭坑節」の名で、宴会のさわぎ唄となる。同じ唄は県南部大牟田市の三池炭坑にもあり、1960年代、炭坑節を巡る本家争いとなる。レコードが出て全国的に知れ渡ったのは"三池炭坑の上に出た~"の大牟田の炭坑を唱ったものである。結局、炭坑節の産みの親は「田川市」、育ての親は「大牟田市」ということで決着がついた。その後、大牟田市では炭坑節を使った数々の地域おこしがなされていたが、田川市では特に目新しいものは行われていなかった。(福岡県百科事典ほか)

●学生パワーを地域おこしに活用すべし

中村さんの人物像と創作炭坑節が生まれるまでの経緯を以下に示す。

中村さんはもともと、県立大の自治会長を務めており、地域おこしなどにも興味があったことから、県立大や周囲の大学生を集めて、実践学習グループTR-C (※1)を立ち上げた。このグループは地域の大学生のネットワークを深めるとともに、地域のイベントや講演会、地域おこしのお手伝いをすることを目的としたグループだった。

去年、地元の町おこし支援グループから「がんばれ田川!プロジェクト21」という地域おこしプロジェクトの話が持ち上がった。プロジェクトの企画を練っていく中で、中村さんの頭にあったのは、みんなで盛り上がれる「情熱のカーニバル」を開催すること、地元の貴重な資源である「炭坑節」を使うことだった。

後に、プロジェクトはいくつかの部門で運営される こととなり、中村さんはカーニバル部門を担当するこ ととなる。

カーニバルに炭坑節を使うにしても、所詮、盆踊りの時にかかる「正調炭坑節」(普段の盆踊りにかかる曲)では広がりがない。

様々な人と相談しているうちに、炭坑節をアレンジ して創作炭坑節ができないかという結論に達した。

●パラタンが一人歩きをはじめた

創作炭坑節といわれても、年輩のプロジェクトメンバーからはイメージがよく分からないということだった。そこで、カーニバル部門の学生10名集めてイメージが分かってもらえるようなサンプルをつくることになった。

中村さんはもともと、バンドの経験があるほか、お 祝いなどでシンセサイザーやギターでちょっとした曲 をつくるなど、遊びで曲を作る趣味があった。

炭坑節をパラパラ(※2)風に踊ることが決まってからは、それまでの遊びの作曲の経験を活かして、彼一人でパラパラ風炭坑節(略してパラタン。正式名称「PARATAN2001」。)にアレンジして仕上げた。さらに彼は、沖縄民謡風の「YOISA さのよい節」、かわいいアレンジをした「パラタンキッズ」を製作している。

紙面ではこれらの完成度の高さをお伝えすることが できないのが残念である。

カーニバルのPRのために結成されたチームの名は

CDR (筑豊ダンスレボリューション) 21。後に田川シティマラソンの壮行会があり、そこで踊ったものがテレビ放映され、一躍注目を集めることとなる。このテレビ放映がきっかけで地元の小学校から踊りの指導依頼がいくつかくるようになる。

その後もカーニバルの宣伝部隊として出演し、地元 や全国ネットでこの踊りが流れるようになる。しかし、 パラタンだけが注目を集めた。カーニバルよりもパラ タンが注目を集め、パラタンだけが一人歩きをはじめ るようになる。

今年5月に創作炭坑節の公募をはじめた。この頃、 地元ではすでにパラタンが浸透しており、創作炭坑節 への関心が高まっていた。

●やろうと思えば何とかやれる

。この頃から、中村さんが創作炭坑節でイメージして いたのは高知や札幌で話題になっている"よさこい" である。大勢で踊って街中を練り歩くというものであ る。これを実現すべく中村さんは田川署に何度も通う ことになる。はじめは全く話を聞いてくれなかった警 察がいつのまにかアドバイスをくれるようになった。 高知や札幌のよさこいでは、街中を練り歩くことでい くつかのトラブルがあったということで、田川の街中 を練り歩くことはできなかったが、田川署の協力で会 場である県立東鷹 (とうよう) 高校 (工業団地の一角 にあるので休日は交通量が少ない)の前の道路を封鎖 して、出場チームが曲にあわせて練り歩くように演出 することが可能となった。ついでに会場の様子を書い ておくと、高校前の道路を練り歩いた後、校門をくぐ り、グランドの奥に設置されたステージまでさらに練 り歩き、審査員のいるステージ前で踊りのフィナーレ を飾るという設定であった。

●カーニバルは大成功に終わった



子ども達にもとっつきやすいパラタン

よかネット No.54 2001.11

マスコミも注目して いる CDR21 の取り 組み



9月23日(日)「がんばれ田川さのよい祭!」と題して中村さんが描いてきたカーニバルが開催された。後日あった報告によると4,500名もの来場があったそうである。メインイベントである創作炭坑節コンテストには20チームの出場があった。ちなみに優勝賞金は30万円だった。

コンテスト中、私が大いに笑わせてもらったのが熟年女性の10人くらいのチームだった。はじめは浴衣姿で正調炭坑節を踊っていた。普通に終わったなと思うと、突然、全員、浴衣を脱ぎ捨てて、中に来ていたレオタード姿となり、パラタンを踊り出した。

創作ダンスというと若者だけ(主に10~30代)が盛り上がるようなイメージを持っていたが、地元の保育園から健康体操のグループまで年齢層が広いことに驚いた。はっきりいってこれほどにも広い年齢層にパラタンが影響を及ぼしているとは思っていなかった。

コンテスト終了後、本家本元であるCDR21のパラタンをはじめて拝見させていただいた。スコップを担ぐ様子など、オリジナルの振り付けを随所に残している。

最近、盆踊りに子どもが少ないと聞く。何事にも言えることだが、伝統は時代に即して変わっていかないと続かないと思っている。炭坑節を次世代に伝えていくにもいくつかの方法があると思うが、こうした路線(現在の子ども達がとっつきやすい踊りの形体)もその一つとして必要なのであろう。

●創作炭坑節カーニバルとCDR21の今後

結局、カーニバルに要した費用は約900万だそうだ。 このイベント開催にあわせて地元から協賛金、カンパなど約450万の収入があり、このほかパラタンなど3 つのアレンジ曲が入ったCDによる収益など含めても、まだまだ900万には足りない。来年以降もこのカーニバルを継続していくには、開催費用の調達が大きな課題となりそうだ。今後は、行政、商工会、青年会議所などを巻き込んで進めていきたいという。

学生だけで構成するCDR21には、相変わらず、踊りの指導依頼、イベントの出演依頼、マスコミの取材など、多いときにはイベントが1日に3件入ることもあるなど多忙な生活を送っている。今後は就職するメンバーも出てくるだろう。そこで、中村さんに今後、チームの存続等についてどう考えているかを聞いてみた。

- ・創作炭坑節を地元に浸透させ、地域おこしを推進することを目的とした創作炭坑節振興会 (仮称) として存続していく話があがっている。地元の企業等が振興会のバックアップすることを検討している。
- ・会の運営は多くの人材が必要となるので、地元で創作炭坑節に関心があるグループなどの協力を得ることなどを考えている。

地元の保育園、幼稚園、小学校などで毎年、パラタンを教え、その他様々なグループに対して踊りの指導を続けていけば何十年後かには、壮大な"パラタン市民総踊り"ができるのでは、と意見を聞いてみた。

- ・カーニバルの実行委員会では創作炭坑節を田川市だけではなく、田川市郡10市町村に拡げていきたい。
- : 今回、開催場所が田川市内だったこともあり、周辺 の田川郡の自治体の関心は今ひとつだった。

今後、カーニバルの開催場所なども頭の痛いところ である。

今回は第1回目なのであくまで頭に描いていること を実現するということが目標だったそうだ。これから は今回の体験を活かして、次につなげていきたいとい うことだった。

今後、どう発展していくのか見守っていきたいと思 う。 (おだ こういち)

※1:TR-C (フランスの三色旗=「革命」の象徴)を略したもの

※2パラパラ:アップテンポな音楽で踊る、上半身の動きが 激しいダンスの一種。下半身は主に交互に左右に動く。

なぜ人々はファーマーズマーケットが大好きか? アメリカでも百姓市がはやっている

本田 正明

去る10月13日に志摩町で、カルフォルニア大学で環境心理学を研究されているロバート・ソマー氏が「なぜ人々はファーマーズマーケットが大好きか?」という内容で、小さな講演会を催された。

ファーマーズマーケットとは、産直農家の露天市場 (百姓市) のことであり、志摩の朝市などが開催される 志摩町の方々の関心は高く、ファーマーズマーケット の経営などについて、盛んに質問がなされた。

●ファーマーズマーケットのネライ

ファーマーズマーケットには3つのネライがある。 1つめのネライは、小さな農家をいかに元気にするか、 作物を直接、消費者に売ることで、どうやって収入を 増やすかというものである。2つめのネライは、消費 者にとっていいもの、安く新鮮で、香りの良いものを 届けることである。3つめがコミュニティーにとって もいい環境を提供することである。人の集まる場所を つくり、野菜や果物を販売するだけではく、コミュニ ティーセンターなどを設置してガーデニング教室など の情報交換の場を提供することがネライになっている。

●ウィスコンシン州の事例

州議会のまわりでファーマーズマーケットを開催している。議会の公務員にも昼食のメニューなどが人気になっている。また、地元の人との交流拠点にもなっており、議会を身近に感じられる効果が生まれている。公共集合住宅は低所得者の住宅なのだが、住民に対してファーマーズマーケットのチケットを発行して、いいものを安く買えるような政策を行っている。

●カルフォルニア州デービス市の事例

デービス市は人口4万人ぐらいの町であり、公園を利用したファーマーズマーケットには、日曜日の天気のいい日には、50人~70人ぐらいの農家が店を出し、5000人ぐらいの人が集まっている。

ファーマーズマーケットは、農家が直接消費者にものを売るために、いつの時期に何をつくるとよく売れるかというようなことを頭に入れてものをつくるようになり、旬のものをつくって売るようになった。

現在では、トマトだけでも15種類、なすびは20種類

も販売されるようになり、農家が誇りをもって生産し ている。地域の作物で多品種・多品目を維持すること で、遺伝子の多様性も守ることができている。ファー マーズマーケットは新商品や新品種をためす絶好の場 にもなっており、新しい商品の市場調査を行う機会を 提供している。ズッキーニの花の部分などは、それま で捨てていたものだが、オードブルとして食べれるこ とがわかると売れるようになった。このように実験的 に新しいものを販売したりすることで、付加価値がで てきたり、収入が増え、自分の創意工夫によってかせ ぐことができることに多くの人が気づきはじめている。 また、新商品や新品種は、消費者の味覚の幅を広げる 効果もあり、カンボジアやタイからの移民が自国のチ ンゲンサイを売っていると、地元のレストランで取り 扱ってもらえるようになった。ダチョウの肉も当初は、 大きな市場では扱ってもらえなかったが、油分が少な くファーマーズマーケットで人気になると、大きなマ ーケットでも扱ってもらえるようになった。小さなカ ンガルーの肉は、まったく売れなかったのだが、すぐ やめるごとによってそれほどハイリスクにはなってい

ファーマーズマーケットの消費者から、オーガニックな (有機農法でつくられた) 野菜や果物のニーズが高まり、ファーマーズマーケットに出している農家がオーガニックの基準をつくり、カルフォルニア州が認めるという証明書を発行するようになった。証明書がつくと高い値段で売れるために、最近では大きなスーパーマーケットでも売られるようになっている。

ファーマーズマーケットは、地域の活性化に貢献していており、使用されなくなった建物の再活用ができたり、マーケットの周りにもお金が落ちるようになった。大きなスーパーの駐車場を使ったファーマーズマーケットもでき、スーパーにないものを売ることで客を集め、またスーパーもファーマーズマーケットによる宣伝効果や、スーパーでコーヒーを買ってマーケットを楽しむ人などが生まれることで、うまく共存共栄をしている。さらに、環境保護団体の活動コーナーもでき、資料などを展示したり、報告なども行っている。ファーマーズマーケットのイメージが良いことで、選挙の候補者が店とコーナーを出すこともでてきた。それによってファーマーズマーケットも支援され、さらに活性化している。

皆で堀割の掃除に取り組み、 地域の資源として活かしている柳川

愛甲 美帆

第3セクター研究学会(地域経営セミナー)の翌日、 広松さんの案内で柳川の現在の堀割の様子を見学に行 くエクスカーションがあった。西鉄福岡駅から特急で 40分。水郷柳川に着いた一行は堀割を目の前にし、さ っそく川下りの舟に乗り込んだ。

舟でゆっくりと進んでいくと、かつてこの堀割が生活に根ざしていたことが今も伺えた。住宅街の裏の路地が堀割となっているため、舟で移動する我々は路地裏をぬって進み、生活の一部を見せていただいている気分だった。各家の裏庭や勝手口からは、以前は水をくむために取り付けられた階段が今でも残っている。堀割はまるで自分の家の庭の一部である。実際に川を挟んだ向こう岸に庭があり、そこに渡るための小さな舟が今でも係留されているところもあった。こんなにも風情のある堀割が20年前は汚れていたとはとても思えなかった。

●水の浄化に対する住民の取り組み

舟上では広松さんが水の浄化や住民の取り組みについて詳しく説明してくださった。

- ・よく生活雑排水を流すと環境に悪いといわれるが、 生活雑排水に含まれる合成洗剤がバクテリアをなく してしまうのが悪いのであって、生活雑排水自体は 微生物のエサとなり、ある程度流れることは必要で ある。
- ・また、自然保護の視点だけで「守らなければならない」と捉えるのではなく、食文化・生活文化の視点



川下り舟に乗り込んで出発

が大事だ。

- ・住民による活動では年に1回、一斉清掃活動が行われている。また、水利組合、清掃業者、住民グループで多いところは年に6回清掃をしているところもある。
- ・掘割には、水位を調整するための水門(約200個)があちらこちらにある。この水門は全て人間の手で上げ下げをするため管理の行き届いてないところもあるので、広松さんもこのことは嘆いておられた。

当日も岸についている水位線よりも水が少ないところがあり、実際水位が低い場所と高い場所では水の澄 み方が全く違った。

所 員 近 況

圏首が回らなくなって、周りがよく見えたこと。

.......

9月の中頃、突如、首から後頭部に激痛がはしった。 以来、病院通いが続いている。最初、寝ちがえと思っ たが、どうも痛みが尋常ではなかった。椅子から立ち 上がった時、両足の体重移動に伴う小さな体のぶれで も激痛になった。ひどいときは頸動脈の鼓動、呼吸、 ものを食べるため口を開けるのさえ痛みになった。

整形外科でレントゲンを撮ると、頸椎の間が狭まって接合面が後ろにせり出し、神経を突っついている。

何もかもはじめてのことで大層ショックを受けた。 こういう激痛の状態が1週間以上続くと、無意識なう ちに自分の生活行動も影響を受けるのだと思う。

まず人混みの中を身を置くのに非常に恐怖を感じるようになった。前方から人が来る分は、まあ予測して避けることができる。しかし、後ろから歩いて来た人や自転車が肩に触れると、それだけで激痛が走り、横断歩道上で立ち止まり必死に痛みをこらえた。特に朝の通勤ラッシュはまるで戦場で、後ろから走ってきた人にぶつかられたときは痛みで腰がくだけそうになる。

それから視界が狭くなって、自分自身に気を遣わなくなった。首を動かすのが恐怖なため、朝の洗顔、顎下のひげ剃り、歯磨き、洗髪、お風呂など全てが面倒くさくなった。ある時など、お昼を食べにお店に入って座敷に上がろうとしたとき、ふと見ると左右の足は全く別の靴下を履いている。自分が履く靴下の確認作

●住民の手でイメージづくり

柳川といえば、川下り・うなぎ・北原白秋と誰もが 思い浮かぶのではないか。私は初めてゆっくりと町の 中を歩き、こんなにものんびりとした城下町が近くに あったのかと思った。現在川下りは7社、計270隻の 舟で賑わっており、その中で最も大きな会社は50名以 上の雇用があるという。20年前、堀割がなくなってい たら地域産業の発展もなかっただろう。堀割を自分の 子どものように知り尽くし、愛する広松さんの思いが 住民を動かしたことの大きさを実感した。

これらの地域の効果を考えたときに、町の資源である堀割を守ろうという住民の意識を継続させていくことが大事だと思った。 (あいこう みほ)

業すら面倒になっていたのだ。

こうして日頃とは少し違う状況で生活してみると、 健康な時にはあまり感じなかった、お年寄りや身障者 が抱く人混みへの恐怖心などを、少しだけだが分かる ような気がする。自分が歩くペースが周りと少し違う だけで、振り返りざまに、明らかな迷惑顔を見せられ ることも少なからずあった。

反対に意外な親切もあった。痛みが一番ひどかった 時は30 cmずつしか足が前に出ずヨチヨチ歩きをしてい たが、電車で何度か席を譲ってくれたのは、多くの場 合、高校生や大学生、お年寄り、中高年の女性だった。 駅で荷物を落としたときに数分間、無言で拾い集めて くれたのは茶髪の学生さんだった。

それに対して、車内での態度の最悪は自分と同年代と思われるサラリーマンやOLだった。今の日本の中で一番思いやりがなくて、自分のことしか考えず、傲慢なのは実はこの世代じゃないか?と電車の車中で何度も考えこんだ。 (尾崎 正利)

圏北波多村で唐津焼と梨ジャム作り

10月の13・14日の一泊二日で佐賀県北波多村での「あなただけの唐津焼と梨ジャム作りツアー」に参加した。これは、平成8年に行われた「世界・炎の博覧会」の収益金で、県内の14市町村を対象にグリーンツーリズムのテスト的な催しとして実施されてきたもので、この事業は今年が最後ということだった。

2カ月前新聞でこの事業を知り、前々からやってみたかった陶芸を窯元で体験できるということで、妹と即日申し込みをした。

参加者は、女性の友達同士が多く、3歳の女の子まで含めて17人。皆さん日頃から焼き物や陶芸に興味がある方ばかりで、私と同じように「窯元での陶芸体験」に惹かれて申し込まれた方ばかりだった。

1日目は、3組に分かれて窯元へ向かい念願の器づくりに取り組んだ。私がお世話になった窯元は、一人でされていたが、棚には所狭しと絵付けを待っている器があった。工房の中はひんやりしており、ピーンとした緊張感があって、図工が苦手だった私も何か良いものができそうな気分になってきた。

コーヒーカップを作ることに決め、先生が作ってくれた丸い土台に(これを作るのが難しい)、土を細長い蛇状にして巻き付けていく「手びねり」という方法で作っていく。その後ろくろで整えるのだが、私の手つきを見かねた先生の手にかかると、見事にきれいなカップとなった。同じ窯に行ったもう一組の家族は、絵心ならず器心があるのか皆上手で味わい深い作品となっていた。私と妹は他にも何点か作ったのだが、互いの作品を「これも味わい」と割り切ることにし、土の感触や形作りを充分楽しんだ。

2日目は、梨狩りを楽しんだ後、村の女性グループ の指導による梨ジャム作り。その後、昨日の器に絵付 けというスケジュールだった。

村の公民館で、2組に分かれて梨ジャム作りに取りかかった。皆さん梨でジャムとはどんなものだろうと興味津々である。梨をむいたり、鍋に砂糖をいれたりと作業する中ではワイワイ、ガヤガヤと話に花が咲いた。梨ジャムに限らず、梅ジャムや漬物などの作り方のコツも教えてもらった。

指導してくれたグループの方は、今加工品づくりに 試行錯誤されているようで、当日も鍋の様子を伺いな がら「もう砂糖を入れてもよかぁ」とか「この前はこ んくらいの水でよかったばってんね」とか、「もう少し 水を入れてみましょうか?」と相談しながらの作業だ った。完成したジャムは、りんごのコンポートのよう

手づくりジャム の制作風景



で洋菓子に合いそうな食感の良いジャムであった。

ツアーではこの他にも、唐津焼の歴史を聞いたり、 日本に初めて伝えられた中国・朝鮮系の作陶法(割竹 式登り窯)を見学したりと充実した内容だったが、こ の地元の女性達との交流は今回のツアーをよりおもし ろく印象に残るものにしたと思う。

気になる私の唐津焼きであるが、11月の村のお祭りで展示され、そこで渡してもらえるそうだ。もう一度行けるので今から楽しみである。 (愛甲 美帆)

編集後記

圏友人から「コンペに応募するので手伝ってほしい」 との依頼があり、手伝うことになった。

新潟県のとある地域に住み込んで地域おこし活動を行うものである。インターネットで広く全国に向けて公募していた。

最低2年間の活動、年間60日以上の現地滞在などの条件のほか、滞在補助15万円/月が支給される。 提案だけで終わるコンペではなく、地元に入り込んで実践を伴うコンペである。

地域おこしは地元や地域に関わる人に「のぼせもん」がいないことには進めにくいことが多いが、こうして「のぼせもん」を広く公募するというのも新しい地域おこしの形であるような気がした。

昨日、その友人から1次審査(全国で130人中20 名程度)が合格したとの連絡があった。最終審査(全 国で5名程度)に向けて、作戦会議をしなくては・・・。

(小

よかネット No.54 2001.11

(編集·発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130